

「同じ釜の飯を食う」こと

別府大学

文学部長 友永 植

教職を目指す皆さんの参考になることを何か書いて下さいということで、考えあぐねるまま、私が受けた学校教育の経験を振り返ってみました。そこで改めて気付いたのですが、還暦を迎えた今、私の脳裏に浮かんでくるのは、多くの先生方から授かった個々の知識についての記憶ではなく、先生方が折に触れて話して下さった「歴史やモノについての見方、考え方」といった学問の道理にかかわる記憶だということです。60歳に至る間に、老化によって知識の多くが失われて、人の世を生きる知恵のみがかりうじて残ったということかも知れませんが、また考えようによっては、次のような話にも通じるかも知れません。

儒学の経典『論語』の一節です。『論語』は孔子と弟子の対話を記した書物ですが、孔子が愛弟子の子路に学問を修める上で心すべきことを指摘した中で、次のように言っています。「知を好み、学を好まざれば、その弊や、蕩。（『論語』陽貨）。私はこの言葉を、「知識を吸収するだけで、そこに貫かれた道理を学ぼうとしなければ、それは知識を寄せ集めたに過ぎず、ものの役には立たない」といったふうに理解しています。孔子は「学んで思わざれば、則ち罔し（『論語』為政）」（いくら学んでも、それについて深く考えなければ、理解したことにはならない）とも言っています。

知識は教えることによって与えることができますが、また自ら学ぶことによっても獲得することができます。しかし、知識を体系化し、そこから真理を洞察するすべは、教育を通して培われるものです。知識を教えること、学ぶことは大切なことですが、何のためにそれを教え、また学ぶのかを見失ってはいけないと思います。知識は忘れ去られますが、それを貫く真理は心に刻まれて残ります。皆さんもご存じのように、本学の「建学の精神」も真理を求めることの意義を謳っています。

ところでまた、私の記憶に印象深く残っていることがあります。30数年も前のことです。当時、私は北海道大学の大学院生で、東京の大きな学会で発表する機会を得ました。その時、地方から上京して衆人を前に報告する私を心配したのだと思いますが、私の恩師が「同じ釜の飯を食ったものとして、会場で見守ってやりたいが、都合で行けないので、頑張ってくい」とおっしゃってくれました。私は九州の大学を卒業した後、この先生を慕って北大の大学院に進学したのですが、大学の学部を異にしていたこともあり、何となく先生に対し遠慮を覚えていました。しかし、この「同じ釜の飯を食う」という言葉に接したとき、胸に熱いものがこみあげてきたのを、今でも鮮明に覚えています。「同じ釜の飯を食う」とは、生活を共にするという意味で、そこには家族同様の信頼関係が存在します。かつて私が感激したのも、そのような意味で恩師の言葉を理解したからだだと思います。信頼関係に裏打ちされない言葉は、単なる記号に過ぎません。今更言うまでもないことですが、教育は教える者と教えられる者との信頼関係を前提として、始めて成り立ちます。

孔子は晩年、13年間にわたり弟子たちと各地を遊説し、起居を共にしました。正に「同じ釜の飯を食った」わけです。今日の学校教育の場で、それを文字通りに実践することは勿論できません。しかし、教師は一日の大半を子どもたちと過ごすわけですから、「同じ釜の飯を食う」に等しい環境にあるといえます。授業であれ、生活指導であれ、子どもたちと一期一会の思いで接すれば、やがて信頼関係が生まれます。皆さん方が、知識の切り売りを生業とするのではなく、熱く真理を語るとともに、子どもたちから慕われる教師になってくれることを期待します。